「いらっしゃる」系拡大の様相

―江戸後期から明治２０年代まで―

山田　里奈

【キーワード】近世敬語　近代敬語　いらっしゃいます　いらっしゃる

1. はじめに

「いらっしゃる」は、「入らせらる」から転じたシャル敬語である。シャル敬語は近世に多く使用が見られ衰退していくが、この語は、その流れに逆行する形で発生・発展し、現代に至るまで尊敬動詞として用いられてきた。また、山西正子(1972)が触れているように、出自は異なるが形の上で類似する「いらっしゃる」の使用拡大を「おっしゃる」が支えたと考えることができるが、これについては他の機会で述べたい。

「いらっしゃる」の発生・発展については山西(1972)に詳しい。この論考は周辺の事象をも含めて史的変遷の過程を広い視野から詳細に考察したものである。ただ、氏が扱う「いらっしゃる」の例は「いらっしゃり（い）[1]ます」の形で「ます」が接続したものをも含んでおり、聞き手に対して使用したもの、第三者に対して使用したものすべてを含んでいる。敬意の上でこれらを区別して扱うことが必要だと思われるので[2]、本稿では対称の用法に限定して「いらっしゃいます」と「いらっしゃる」

---

[1]宮地幸一（1980）は、江戸後期になると「い」の使用が多いこと、「り」の方が改まった言い方であると述べる。今回は用例数が少ないため、「り」と「い」による敬意の差は考えず、以下、「いらっしゃいます」に「いらっしゃります」を含むこととする。対称の用法に限り、「いらっしゃり（い）ます」「おいでなさり（い）ます」について調査すると以下の表のようになる。滑稽本における「いらっしゃります」の２例中１例は、武士の言葉である。

滑稽本	i	ri	re	計
おいでなさいます	11	6	1	18
いらっしゃいます	3	2	0	5

人情本	i	ri	re	計
おいでなさいます	29	2	1	32
いらっしゃいます	14	0	0	14

＊【表 2～4】と用例数に違いが見られるのは、階層が不明のため除外した例や「である」の意味を表す例も含むためである。

[2]山崎（1966）は、「尊敬動詞＋ます」を「第一段階（最高敬語）」、尊敬動詞単独の場合を「第二段階（普通敬語）」に分類する。同様に小島俊夫（1974）では、前者を「段階Ａ」、後者を「段階Ｂ$_1$」「段階Ｃ$_2$」とする。両氏とも「ます」下接により表す敬意に差を認めている。

を最初から区別して扱い、山西(1972)で示された発展過程をより詳細に見ていくことにしたい[3]。以下、①江戸後期から明治２０年代（以下、「明治」）までの対称の用法において、「いらっしゃる」系が発展する様相、②江戸後期の対称の用法における「いらっしゃいます」と「いらっしゃる」の使用に量的な差が見られること、について述べる。

なお、山西(1972)に示された洒落本の用例を「いらっしゃいます」と「いらっしゃる」に分けて表にすると[4]**【表 1】**のようになり、「いらっしゃいます」に偏っていることがわかる。

【表１】

作品	刊行年	いらっしゃいます	いらっしゃる
駅舎三友	1779?	3	0
浮世の四時	1784	0	1
角雞卵	1784か	1	4 ＊
一目土堤	1788	0	2
大通契語	1790	1	0
南品傀儡	1791	9	0
商内神	1802	2	0
お染久松色読販	1813	2	0
合計		18	7

＊４例とも第三者に対して用いる例。

2. 先行研究

山西（1972）では、早い例として洒落本『駅舎三友』(1779？）の「さうおっしゃらずにいらっしゃいまし」など３例を挙げる。これは、辻村敏樹(1968)が初出例と断言はしていないが、早い例として挙げた例である。『日本国語大辞典 第二版』の初出例は、洒落本『角雞卵』(1784 か)の「ハイきていらっしゃいます」である[5]。両者から江戸中期の使用が早い例であることがわかる[6]が、この時期「行く・来る・いる」の意味を表す有力な尊敬表現は、「おいでなさる」「動詞連用形＋なさる」であった。「いらっしゃる」は、明治以後勢力をのばし明治２０年以後かなり現れ、明治末から大正にかけて量的にも用法的にも確たるものとなる。

---

[3] ただし、山崎久之（1966）では、「いらっしゃります」を「第一段階（最高敬語)」とするが、「いらっしゃる」は体系表に載せていない。式亭三馬の作品では一般的に用いなかったためと考えられる。

[4]山西（1972）同様『江戸時代文藝資料』1 巻（名著刊行会 1964）で確認した。

[5] この例は補助動詞の例であり、山西（1972）は、「補助動詞用法はさきにあげた⑦（執筆者注：初出例で挙げた『角鷄卵』の例）のみで、まだ十分には発達していなかったものとおもわれる。(P. 67)」と述べている。

[6]ただし本動詞と補助動詞「でいらっしゃる」「ていらっしゃる」ではその発生に遅速がある。(辻村敏樹（1968)『敬語の史的変遷』(P. 214)、吉田金彦（1971)『現代語助動詞の史的研究』(P. 538)。)

3. 調査対象資料・方法

3.1 調査対象資料[7]

【江戸後期】『浮世風呂』『浮世床』『八笑人』『七偏人』（以上、「滑稽本」）『春色梅児誉美』『春色恵の花』『春告鳥』『閑情末摘花』『春色恋廼染分解』『甚唄三人娘』〈第三編まで〉（以上、「人情本」）**【明治】**『西洋道中膝栗毛』『安愚楽鍋』『怪化百物語』『巷説児手柏』『当世書生気質』『新磨妹と背かゞみ』『雪中梅』『浮雲』『花間鶯』『緑蓑談』（前・続）『細君』『二人女房』『多情多恨』

3.2 方法

「行く・来る・いる（補助動詞を含む）」の意味を表す待遇表現の体系表を作成し比較する。ただし、今回扱う「いらっしゃいます」「いらっしゃる」と関わりのある表現を中心に考察するため、本稿では尊敬表現にしぼって用例を収集する。「ます」「ございます」などの丁寧語と共起する「いらっしゃる」を「いらっしゃる～ます[8]」と示す。「ます」と離れた場合、敬意にどのような差が見られるかを知るためである。「いらっしゃいます」「いらっしゃる～ます」「いらっしゃる」を合わせて述べる場合、「いらっしゃる」系と呼ぶ。「おいでなさる」系等も同様である。上下関係、階層、性差の観点から考察を進める[9]。

（１）調査対象　聞き手に対して用いる例を扱う[10]。命令表現（命令・禁止）を含み、表中（　）で内訳を示す。命令表現のなかには、命令の意味を表さず挨拶として用いる例を含むこととする。なお、表中の「おいで」は命令形「おいでなさい」の「なさい」が省略された表現をさす。

（２）上下関係の判断基準　石綿敏雄・近藤豊勝（1973）を参考に、下→上のＡの関係、上→下のＣの関係（主従関係、身分・年齢差）、対等のＢの関係（身分差なし）に分類する。なお、親疎関係は適宜注記する。

（３）階層[11]　**【中流以上】**（**江戸後期**）お屋敷奉公経験者またはその予定者、商家の旦那・妻、丁稚や居候または下男下女を家に置く者等（**明治**）官員、代言人、権妻、湯屋の亭主、書生等**【下層】**（**江戸後期**）勇み肌、伝法者、下男下女、乳母、子守、あくたれあま、「長屋に住む」人等（**明治**）車夫、大工、芝居者、野幇間、店の女、下男下女等**【芸妓】**（**江戸後期・明治**）花魁、芸妓、唄女

---

[7] 各資料の詳細は最後の頁に記す。下線部分を引用資料の略称とし用例に記す。

[8] 山崎（1966）は「中止法や文中の使用の時には、文末の『ます』に代用させて、『ます』を省いた形で用いることもある。」と述べ、第一段階に分類する。

[9] 意味による違いについては考察に含めない。

[10] ただし、武士ことばを話す人物の例は除外する。

[11] 山崎久之（1966）、小島俊夫（1974）、小松寿雄（1985）、井藤幹雄（1986）を参考に分類した。

4. 「行く・来る・いる（補助動詞を含む）」の意味を表す尊敬表現

4.1 江戸後期の使用実態

【表 2】江戸後期（中流以上）

述部＼関係	A		B		C		計		
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	
いらっしゃいます	2(1)	8(3)					2(1)	8(3)	29(6)
いらして～ます	2(0)	5(0)					2(0)	5(0)	
いらっしゃる	3(1)	4(1)					3(1)	4(1)	
いらしった(て)	1(0)	3(0)		1(0)			1(0)	4(0)	
おいであそばす		2(1)					0(0)	2(1)	2(1)
おいでなさいます	10(5)	11(3)	4(3)	4(3)			14(8)	15(6)	101(40)
おいでなさる～ます		3(0)		3(0)			0(0)	6(0)	
おいでなさる	10(5)	7(2)	30(15)	19(4)			40(20)	26(6)	
おいでだ～ます			1(0)				1(0)	0(0)	79(24)
おいでだ	3(0)	17(0)	12(0)	11(0)	3(0)	8(0)	18(0)	36(0)	
おいで		3(3)	6(6)	3(3)	2(2)	10(10)	8(8)	16(16)	
連用＋なさる			26(16)	1(0)	7(3)		33(19)	1(0)	34(19)
連用＋っしった(て)			49(49)		3(3)		52(52)	0(0)	52(52)
連用＋たまふ			2(1)				2(1)	0(0)	2(1)
お見えなさる	1(0)						1(0)	0(0)	1(0)
計	32(12)	63(13)	130(90)	42(10)	15(8)	18(10)	177(110)	123(33)	300(143)

【表 3】江戸後期（下層）

述部＼関係	A		B		C		計		
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	
いらっしゃいます		6(2)					0(0)	6(2)	12(2)
いらして～ます		2(0)					0(0)	2(0)	
いらっしゃる		2(0)					0(0)	2(0)	
いらしった(て)	1(0)	1(0)					1(0)	1(0)	
おいであそばす		1(0)					0(0)	1(0)	1(0)
おいでなさいます	4(2)	3(1)					4(2)	3(1)	14(7)
おいでなさる～ます	1(0)	2(0)					1(0)	2(0)	
おいでなさる	4(4)						4(4)	0(0)	
おいでだ		2(1)		2(1)			0(0)	4(2)	12(10)
おいで		2(2)	1(1)	4(4)		1(1)	1(1)	7(7)	
連用＋なさる			1(1)	7(3)			1(1)	7(3)	8(4)
連用＋しゃる	1(0)						1(0)	0(0)	1(0)
お見えなさる	1(0)						1(0)	0(0)	1(0)
計	12(6)	21(6)	2(2)	13(8)	0(0)	1(1)	14(8)	35(15)	49(23)

＊A（下→上の関係）、B（対等の関係）、C（上→下の関係）を示す。
＊（）内は命令表現の内訳を示す。
＊表中の「連用」は「動詞連用形」の略。

【表 4】江戸後期（芸妓）

述部＼関係	A	B	C	計	
いらっしゃいます	1(0)			1(0)	3(1)
いらっしゃる	2(1)			2(1)	
おいでなさいます	7(1)	1(0)		8(1)	29(20)
おいでなさる～ます	1(0)			1(0)	
おいでなさる～です	1(0)			1(0)	
おいでなさる	6(6)	2(2)		8(8)	
おいでなます	6(6)	1(1)		7(7)	
おいでなんす		3(3)	1(1)	4(4)	
おいでだ	14(0)	9(0)		23(0)	36(13)
おいで	5(5)	5(5)	3(3)	13(13)	
連用＋なさいます	1(0)			1(0)	31(11)
連用＋なさる	1(0)		1(1)	2(1)	
連用＋なます	15(6)	4(1)	4(0)	23(7)	
連用＋なんす	2(0)	2(2)		4(2)	
連用＋ないます	1(1)			1(1)	
連用＋っしった(て)	10(0)			10(0)	10(0)
連用＋しゃる	12(0)	1(0)		13(0)	13(0)
計	85(26)	28(14)	9(5)	122(45)	

表から、「いらっしゃる」系は下→上のAの関係（以下単にAと示す）で用いることがわかる。そこで分布は異なるが、Aで使用する「おいでなさる」系と「おいでだ[12]」を中心に見ていくこととする。

[12]湯沢幸吉郎（1954）は、「お……だ」「ご……だ」の活用表を挙げ、「お……の」について「連体形に配当した『お……の』を、『お……だ』の一活用形と見るならば、形容動詞にも、例えば『急な知らせ』『急の呼出し』のような言い方があるから、その連体形の活用語尾に『の』をも認めなければならなくなる」と指摘する。また、小松寿雄（2005）では「オ～ダの活用からは除外した方がよい」と述べる。これらを踏まえ、「お～の」を今回は除外する。

【表2】中、Bで用いる「いらしった（て）[13]」１例は今回扱った人情本の中で最も明治時代に近い『毬唄三人娘』(1862～1865) の例でありBの早い例と考えられる。

（例１）伴さんかよく入らしつたネ（中流以上お民→黒山伴六）【Ｂ】[『毬』第三編下第五回 116[14]]

4.1.1　「いらっしゃる」系

【表す敬意と話し手の特徴】【表 2、3】から「いらっしゃる」系と同様に、「おいであそばす」もＡでのみ使用することがわかる。「おいであそばす」は、お屋敷奉公から帰った女性によって広まった表現であり[15]高い敬意を表す。例２、３の話し手は、中流以上であり、本文中「言葉遣いも遊ばせづくし」と説明がある。例４は除外した例であるが、例２、３の言葉遣いに対して下女が批判していることから、「あそばす」「いらっしゃる」系が高い敬意を表し、一般的に用いる表現ではないことがわかる。また下層の使用を見ても、「よめが、やしきづとめの頃より、部やがたにつとめたる」と説明される人物が使用している（例 5)。

（例２）あなたにもお揃ひ遊しまして御機嫌ようお出遊し。（中流以上人柄のよいかみさま→中流以上ばあさま）【Ａ】[『風』第三編上 164]

（例３）お袋さんお早う入らつしやいましたね。（中流以上人柄のよいかみさま→中流以上ばあさま）【Ａ】[『風』第三編上 164]

（例４）人品の能風をして居てとんだ目口乾だの。遊ばせの、入らツしやいのと、たべつけねへ言語をしてもお里がしれらア。（下女さる→下女おべか（⇒人柄のよいかみさま）[16]）【Ｂ】[『風』第三編上 170]

（例５）御隠居様ヱ。お静に入らつしやいましヱ。（下女弥寿→女主人の姑）【Ａ】[『風』第二編下 122]

従って、お屋敷奉公と関係のある人々によって使用されるという特徴

---

13 「いらしった（て）」には、「いらっしった（て）」も含まれる。

14 （話し手→聞き手）【上下関係】[『作品』巻・編・頁]と記す。

15 辻村敏樹（1968）は、「『浮世風呂』・『浮世床』の敬語」の中で、「『お……遊ばす』の形をとることが非常に多く、やはり主として、屋敷に関係を持つような女達に用いられている。（中略）遊ばせ言葉の主流はかくて屋敷言葉に発したということができよう。ところが、一旦こうして町家（といっても恐らくは格式の高い家）の女達の手にわたった言葉は、忽ちその勢力をひろめて、貧乏世帯のおかみさんや、おさんどんと言われるような女達の間にもひろがっていったことは想像にかたくない。(P. 236～237)」と述べている。

16 第三者の場合、「(話し手→聞き手（⇒第三者))」と記す。

を見出すことができる。

山西（1972）では、例６や『伊呂波文庫』（1836～72）の商家の人物の使用例を挙げて「いらっしゃる」の話し手の広がりを述べる。

（例６）ソシテ奥様の御意に入りまして、名をばお呼び遊ばさずに、おちゃッぴいャ、於茶／＼とお召遊ばして、お客様の入らつしやる[17]度に、此子を御吹聴遊ばすさうでござります。（山西（1972）Ｐ．67）（娘をお屋敷奉公させた母親きぢ→中流以上の女房いぬ（⇒娘の奉公先の客））【Ｂ（→Ａ）】［『風』第二編上 101］

ただし例６は第三者に対する例であり、今回は調査対象外であるが、話し手は娘をお屋敷奉公に出している中流以上の町人が用いたものである。従って、この例をもって話し手の広がりを認めるのは難しいと考えられる。一方、人情本では例７のように話し手に偏りは見られなくなる。また芸妓も客に対してＡで用いる（例 9）。ただし話し手の広がりは見られるが、単独の「いらっしゃる」は命令表現で用いる場合もＡであることから（例 10）、依然として「ます」の有無に関係なく高い敬意を表すといえる。

（例７）なにか考へ出してふさいでいらつしやるねへ。（中流以上お由→中流以上藤兵衛）【Ａ】［『恵』二編上第七回 393］

（例８）ヲヤ今日（こんち）は能被入（あがいらつしい）ました。（芸妓お花→客梅里）【Ａ】［『告』第五編第三十章 591］

（例９）どうして知つていらツしやるへ。（芸妓米八→客丹次郎）【Ａ】［『恵』一編第二回 368］

（例 10）貫郎（ぬきたろう）のお頼みなら否（いなや）はありますまい。サア此方へ入（いら）ッしやい（中流以上お絹→中流以上雪）【A】［『毬』第三編巻下第五回 107］

【挨拶としての使用】滑稽本では、挨拶として使う「いらっしゃいます」の例が１例見られる。この例１１は、銭右衛門が会話の中で、茶屋の子息が自分（＝銭右衛門）に対して用いた発話を引用している例である。（引用以外の発話部分は〈　〉を付す）。「いらっしゃる」の早い時期の使用について、山西（1972）が、遊客や茶屋の人、役者などが用いることが多いと述べる通りである。一方、人情本では、１例ではあるが、例１２のうなぎ屋の女房の例が見られ、山西（1972）の指摘よりも話し手が広がっていると考えられる。

（例 11）〈茶屋の子息が大縞の浴衣で団扇をつかひながら、〉マ是は入らつしやいまし、どうなさいました、此間はお見かぎりでございます〈ト云ふと、どうだ大分寒いのと云つたが、我ながら是等は落話に為（なり）さう

[17] 下線は引用者による加筆。以下、用例に（　）で説明を加える場合もある。

だ。〉（茶屋の子息→中流以上銭右衛門）【Ａ】［『床』第二編上 331］

（例 12）（来客時に）いらツしやいまし。お二階へいらツしやいまし。（うなぎ屋→客お長と丹治郎）【Ａ】［『梅』初編巻之三 83］

【滑稽本と人情本の用例数の相違】「いらっしゃる」系の中でも『妙竹林話七偏人[18]』（以下『七偏人』）を除く滑稽本では、「いらっしゃいます」が４例、「いらっしゃる」が１例であった。この「いらっしゃる」は、『浮世風呂』の例であり、底本とした新日本古典文学大系本の校注に「見世物などの呼びこみの口上、『方々でいらっしゃい』をかけた洒落」とある。役者が用いるという山西（1972）の指摘と一致し一般的な使用とはいえない。

（例 13）謗法罪いらツしやい。（口上）【Ａ】［『風』第四編下 270］

『七偏人』や人情本では「いらっしゃいます」１２例や「いらっしゃる」８例、その促音形「いらしった（て）[19]」１６例と、多くの例を見ることができる。ただし、全体から考えると「おいでなさる」系や「おいでだ」の勢力が強く、「いらっしゃる」系発展の兆しを見るにとどまる。

（例 14）とても被入ツしつたもんだからのヲ（中流以上虚呂→石屋）【Ａ】［『七』五編中 144 下巻］

4.1.2　「いらっしゃる」系以外との比較

【表す敬意】まず、「おいでなさる」系であるが、すべての階層において、主としてＢ以上で用いる。しかし、「ます」下接の有無で見ると、「おいでなさいます」が主としてＡ、「おいでなさる～ます」「おいでなさる」がＢ以上で使用する。ただし、例１８はＢとして扱ったがＣに近い。命令表現になると高い敬意を表さない例も見られるようになる。

（例 15）これは叔父さん、よくお出なさいました。（中流以上米次郎→叔父福富屋万右衛門）【Ａ】［『閑』三編上第十三回 746］

（例 16）何所のかお娘御さんと、並でお在被成て肩を摺つけたり、股を衝突たりして、時々顔を見ちやア、完尓／＼／＼と嬉しさうにしてお在なすつたぢやアございませんか。（中流以上遠世→中流以上清之助）【Ｂ】［『閑』二編上第七回 718］

---

[18] 『妙竹林話七偏人』は 1857～1863 年刊行。他の滑稽本とは隔たりがある。

[19] 洒落本『一目土堤』（P.312）に「夕部はどこへいらしつた、お目にかゝらねへの」という例が見られるが、今回の調査ではこの１例であり、多用されているとはいえない。『日本国語大辞典 第二版』では、洒落本『猫謝羅子』「今日はどっちへいらっしったへ」の例が挙げられている。促音化した形の初出が人情本というわけではないことがわかる。

（例 17）金兵衛さんおまへもおいでなさるだらう。（中流以上源四郎→中流以上金兵衛）【Ｂ】［『風』前編下 51］

（例 18）ハイ忝うござります。些もしお手透にお出なさい。（俳諧師鬼角→中流以上点兵衛）【Ｂ】［『風』第四編上 245］

芸妓による使用も町人同様、「おいでなさる」系をＢ以上で用いる。町人との違いは、「おいでなさる」系に多様な言い方が発達していることである。また「おいでなさる」系を多用することから、「いらっしゃる」が芸妓から発生したのではないと考えられる。いずれも主としてＢ以上で用い、表す敬意に大きな差は見られない。

（例 19）そこに持ツておいでなんすならちよつとお見せなんし。（花魁重の井→侍客忠六）【Ａ】［『恋』三編上第十三回 93］

（例 20）こまりもんざますネサア、みなはんおいでなましヨ。（芸妓賤の戸→芸妓たち）【Ｂ】［『恋』二編中第十回 65］

従って、単独の「いらっしゃる」をＡでのみで用いる「いらっしゃる」系とは表す敬意が異なるといえる。また「おいでだ」は、中流以上がＡからＣまで、下層がＢ以上で用いるが、その使用を見ると湯沢幸吉郎（1954）や辻村（1968）、小松（2005）が指摘するように、「親」の関係に偏っており、単独の「おいでなさる」より表す敬意は少し低い。

（例 21）与太郎町何丁目か、しつてお出ではないかヱ。（下女→３歳の主人徳松）【Ａ・親】［『風』第四編下 280］

【挨拶としての使用】挨拶では、「おいでなさいます」「おいでなさる」を用いる[20]。「いらっしゃる」系は、前述した例１１、１２の茶屋の子息とうなぎ屋の女房のみであり、普段の挨拶では用いない。

（例 22）御隠居さんお出なさりまし。（下男→隠居）【Ａ】［『風』第四編下 287］

（例 23）ヤ旦那お出なさい。（下層でんぼう→中流以上徳太郎）【Ａ】［『床』初編 273］

[20] 他に、「おいで」を挨拶として用いる例も見られる。

4.2　明治初～明治２０年代までの使用実態

【表 5】明治（中流以上）

述部＼関係	A		B		C		計		
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	
いらっしゃいます		17(7)	3(0)	12(2)			3(0)	29(9)	91(17)
いらっしゃる～ます		4(0)	1(0)				1(0)	4(0)	
いらっしゃる～です		3(0)		2(0)			0(0)	5(0)	
いらして～ます	1(0)	3(0)		4(0)			1(0)	7(0)	
いらして～です		1(0)					0(0)	1(0)	
いらっしゃる		12(2)	5(2)	13(4)			5(2)	25(6)	
いらしった（て）		6(0)		4(0)			0(0)	10(0)	
おいであそばす		3(0)		1(0)			0(0)	4(0)	4(0)
おいでなさいます	1(1)	3(1)	1(1)	1(0)			2(2)	4(1)	33(12)
おいでなさる	1(0)	1(0)	7(4)	11(2)	3(2)	4(1)	11(6)	16(3)	
おいでになります	1(0)			3(0)			1(0)	3(0)	12(0)
おいでになる		1(0)	2(0)	4(0)			2(0)	5(0)	
おいでになる～ます		1(0)					0(0)	1(0)	
おいでだ～ます			3(0)	1(0)			3(0)	1(0)	50(26)
おいでだ～です	1(0)						1(0)	0(0)	
おいでだ		1(0)	6(0)		3(0)	9(0)	9(0)	10(0)	
おいで			3(3)	2(2)	7(7)	14(14)	10(10)	16(16)	
連用＋なさる			4(4)				4(4)	0(0)	4(4)
連用＋っしった（て）					2(2)		2(2)	0(0)	2(2)
連用＋たまふ			30(28)				30(28)	0(0)	30(28)
れる・られる			1(0)				1(0)	0(0)	1(0)
おでましになります				1(0)			0(0)	1(0)	1(0)
おこしになります		1(0)					0(0)	1(0)	1(0)
おでましなさる		1(0)					0(0)	1(0)	1(0)
計	5(1)	58(10)	66(42)	59(10)	15(11)	27(15)	86(54)	144(35)	230(89)

【表 6】明治（下層）

述部＼関係	A		B		C		計		
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	
いらっしゃいます	1(0)	11(8)					1(0)	11(8)	30(11)
いらして～ます		4(0)					0(0)	4(0)	
いらっしゃる	3(1)	9(2)					3(1)	9(2)	
いらっせます	1(0)						1(0)	0(0)	
いらっせる	1(0)						1(0)	0(0)	
おいであそばす		2(0)					0(0)	2(0)	2(0)
おいでなさいます		1(1)					0(0)	1(1)	4(2)
おいでなさる～ます	1(0)						1(0)	0(0)	
おいでなさる		2(1)					0(0)	2(1)	
おいでだ～です		1(0)					0(0)	1(0)	7(3)
おいでだ		1(0)	1(0)	1(0)			1(0)	2(0)	
おいで		1(1)		1(1)		1(1)	0(0)	3(3)	
連用＋なさる			3(0)			1(0)	3(0)	1(0)	4(0)
連用＋しゃる			3(1)				3(1)	0(0)	3(1)
連用＋たまふ			1(1)				1(1)	0(0)	1(1)
計	7(1)	32(13)	8(2)	2(1)	0(0)	2(1)	15(3)	36(15)	51(18)

【表 7】明治（芸妓）

述部＼関係	A	B	C	計	
いらっしゃいます	2(2)			2(2)	3(2)
いらっしゃる	1(0)			1(0)	
おいでなさいます	1(1)			1(1)	8(8)
おいでなさる	7(7)			7(7)	
おいでだ		1(0)		1(0)	4(3)
おいで			3(3)	3(3)	
計	11(10)	1(0)	3(3)	15(13)	

＊A（下→上の関係）、B（対等の関係）、C（上→下の関係）を示す。
＊（）内は命令表現の内訳を示す。　　＊表中の「連用」は「動詞連用形」の略。

【表5、6、7】を見ると、中流以上がB以上、下層と芸妓がAで「いらっしゃる」系を用いている。そこで、B以上で用いる「おいでになる」系と、江戸後期との比較のために「おいでなさる」系を対象とする。「お～になる」形式は、辻村(1968)によると、明治２０年頃から増加していく新しい尊敬表現であるが、山西（1972）は、「おいでになる」は、「いらっしゃる」の勢力に押されたままであると述べている。

4.2.1　「いらっしゃる」系

【用例数からの考察】【表 5、6】では、「いらっしゃる」系の用例数は「おいでなさる」系以上に多用されている[21]。ただし「いらっしゃる」系は、山西(1972)の見解のように明治１０年頃までは依然として少なく、明治２０年頃から増加する[22]。使用が増加し、一般的に用いるようになったことがわかる一つの例として、普段の挨拶の例が挙げられる[23]。【表７】の芸妓の２例はともに挨拶として用いている（例 26)。

(例 24) オヤ斎藤さん、入(いら)ツしやいまし。(中流以上お今→法科大学の学生斎藤孝)【A】[『緑』第二十一回 331]

(例 25) ヲヤゐらつしやいまし。先刻からおとつさんがお待兼で。(下女→書生守山友芳)【A】[『当』第十八回 149]

(例 26) ヲヤ被入(いらつしや)いまし。(引手茶屋の女中→客岸たち)【A】[『当』第八回 100]

江戸後期一般的であった「おいでなさいます」による挨拶も２例見られるが、話し手が新造の例と新潟県出身の書生が新潟に戻ったときの例である。一般的には「いらっしゃいます」であったと考えられる。

(例 27) よツくお出(いで)なさいまし。(新造お秀→客吉住)【A】[『当』第十五回 133]

(例 28) 是は旦那、お出(いで)なさいまし。(書生卓一→戸長森村剛蔵)【A】[『緑』第三回 266]

【表す敬意】「いらっしゃる」系を中流以上がＢで用いる。単独の「いらっしゃる」を、Ｂ以上で用いる点が「ます」下接に関係なく高い敬意を表した江戸後期と異なる。次の例２９は『浮雲』におけるお勢と文三の会話、Ｂかつ命令形である。江戸後期、命令表現で「いらっしゃる」を用いる場合もＡのみであったことと比較すると異なるといえる。他にも母親に対して用いる例３０も見られ、Ｂ以上の聞き手に対して広く用いるようになる。ただし下層は単独の「いらっしゃる」を平叙の場合（例 31）も命令形の場合（例 32）もＡで用いており、中流以上とは異なる。

(例 29) さみしくツてならないから些とお話しに入(いら)ツしやいな。(中流以上お勢→中流以上文三)【B】[『雲』第三回 10]

---

[21] 「いらっしゃる」系は江戸後期 9%、明治期 42%、「おいでなさる」系は江戸後期 31%、明治期 15%である。

[22] 明治の「いらっしゃる」系 124 例のうち、明治 10 年までは 24 例（『西』3 例、『安』1 例、『巷』2 例、『当』11 例、『妹』3 例、『雪』4 例)、明治 20 年以降 30 年までは、100 例（『雲』3 例、『花』6 例、『緑』19 例、『緑続』25 例、『二』4 例、『多』43 例）使用が見られた。

[23] 挨拶は、「いらっしゃる」系（命令表現のみ）が江戸後期 9 例中 3 例、明治 29 例中 16 例、「おいでなさる」系が江戸後期 67 例中 5 例、明治 22 例中 2 例（例 27、28）見られた。

(例 30) 先刻までお側に居りましたが、餘り能くおよツて居らつしやるから、一寸と彼方で新聞を読んで居りましたワ。(娘お春→母親)【A】[『雪』上篇第一回 114]

(例 31) ナゼ貴方はそんなに押立尻をして居らつしやるんだヨ。(店の女性お定→客須河)【A】[『当』第二回 68]

(例 32) マア此処へ入らつしやい。(下層八蔵→中流以上國野)【A】[『花』第十回 211]

4.2.2 「いらっしゃる」系以外との比較

まず、単独の「おいでなさる」であるが、中流以上がCで用いる例が見られることから、平叙の場合B以上で用いた江戸後期の使用よりも敬意が下がっていることがわかる。

(例 33) お前さんがモウ官員にやならないと決めてお出でなさるんだから。(中流以上お政→中流以上文三)【C】[『雲』第十一回 56]

次に、「おいでになる」系であるが、今回の調査では、中流以上の使用のみ見られ、B以上で使用していた。従って、高い敬意を表すが使われ始めた段階であり、「いらっしゃる」の方が一般的であったといえる。

(例 34) 叔父さん、夫でもお父さんの御病気の時には、貴君は宇都宮へお出でになつて居まして、御父さんのお隠れになる前の日に御帰りになつたでは御座いませんか。(中流以上お春→伯父藤井権兵衛)【A】[『雪』下篇第四回 150]

5. まとめ

- **「いらっしゃる」系が拡大していく様相**

江戸後期、洒落本や滑稽本では、「いらっしゃる」系を使用する話し手に特徴が見られ、用例数も少ない。表す敬意は「いらっしゃる」系すべてがAであり高い。表す敬意は変わらないが、人情本になると話し手の特徴は見られなくなり、促音形「いらしった(て)」も多用される。しかし、「おいでなさる」系や「おいでだ」には及ばず、拡大する兆しにとどまる。明治になると、江戸後期に一般的に用いた「おいでなさる」系の敬意が下がり、「いらっしゃいます」が主としてA、「いらっしゃる」はB以上となり、高い敬意を表す表現として多用されていく。

- **「いらっしゃいます」「いらっしゃる」使用の量的な差**

「いらっしゃいます」「いらっしゃる」の発生は同時であり、遅速は認められないが、対称の用法で用いる場合、表す敬意と待遇表現体系から考えると、発生時は「いらっしゃいます」の方が求められたといえる。これは、①当時の待遇表現体系の「第一段階」の条件「尊敬動詞＋ます」

に合うのが、「いらっしゃいます」だったこと、②「おいでなさいます」の敬意が下がりつつある江戸後期（滑稽本・人情本）に、それを補う表現として必要とされるのは、「いらっしゃいます」であったことが考えられる。また、江戸後期、Ｂで用いる表現は「おいでなさる」が有力であり、その周辺を「おいでだ」や「動詞連用形＋なさる」などで補完し合っていた。単独の「いらっしゃる」がＢで使われるには、これらの表す敬意が下がる明治時代を待たねばならなかったと考えられる。

【参考文献】

- 石綿敏雄・近藤豊勝（1973）「近世の風俗と敬語生活」『敬語講座』4、明治書院
- 井藤幹雄（1986）「戯曲・落語速記にみる明治期の丁寧表現」『國學院大学大学院文学研究科論集』13
- 小島俊夫（1974）『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
- 小松寿雄（1985）『江戸時代の国語 ： 江戸語その形成と階層』東京堂出版
- 小松寿雄（2005）「江戸東京語の敬語形式オ～ダ」『国語語彙史の研究』24、和泉書院
- 辻村敏樹（1968）『敬語の史的研究』東京堂出版
- 宮地幸一（1980）『ます源流考』桜楓社
- 山崎久之（1966）「江戸庶民語の待遇表現の体系（１）―三馬の作品を中心として―」群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編、16〔『続国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院、1990 所収〕
- 山崎久之（1990）『続国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院
- 山西正子（1972）「『いらっしゃる』考」『国語学』88
- 湯沢幸吉郎（1954･1957）『江戸言葉の研究』明治書院
- 吉田金彦（1971）『現代語助動詞の史的研究』明治書院

【調査対象資料】【滑稽本】『諢話浮世風呂』式亭三馬（1809～1813）―『新日本古典文学大系』／『柳髪新話浮世床』式亭三馬（1812～1813）―『新編日本古典文学全集』（以下『新編』）／『花暦八笑人』瀧亭鯉丈（1820～1849）―岩波文庫／『妙竹林話七偏人』梅亭金鵞（1857～1863）―講談社文庫**【人情本】**『春色梅児誉美』（1832～1833）―『日本古典文学大系』／『春色恵の花』為永春水（1835）―『日本名著全集』（以下『名著』）／『春告鳥』（1836～1837）為永春水―『新編』／『閑情末摘花』松亭金水（1839～1841）―『名著』／『春色恋廼染分解』（初編～三編）山々亭有人（1860～1862）―浅川哲也『人文学報』413（首都大東京）2009／＊『春色恋廼染分解』（四編～五編）―浅川哲也『人文学報』428（首都大学東京）、2010／＊＊『毬唄三人娘』（初編～三編）松亭金水（1862～1865）―浅川哲也『人文学報』443（首都大学東京）、2011**【明治】**『萬国航海西洋道中膝栗毛』仮名垣魯文（1870～1872）〈明 3〉、『牛店雑談安愚楽鍋』仮名垣魯文（1871～1872）〈明 4〉―『明治文學全集』（以下『明

治』）／『怪化百物語』高畠藍泉（1875）〈明 8〉―『新日本古典文学大系明治編』（以下『明治編』）／『巷説児手柏』高畠藍泉（1879）〈明 12〉、『一読三歎当世書生気質』坪内逍遥（1885～1886）〈明 18〉、『新磨妹と背かゞみ』坪内逍遥（1886）〈明 19〉―『明治』／『雪中梅』末広鉄腸（1886）〈明 19〉―『明治編』／『浮雲』二葉亭四迷（1887～1889）〈明 20〉、『花間鶯』末広鉄腸（1888）〈明 20〉、『緑蓑談』（前編・続編）須藤南翠（1887）〈明 21〉―『明治』／『細君』坪内逍遥（1889）〈明 22〉、『二人女房』尾崎紅葉（1891）〈明 24〉―『明治編』／『多情多恨』尾崎紅葉（1896）〈明 29〉―『紅葉全集』なお、「いらっしゃる」系の該当箇所に関して、近世のものは、明治大学図書館所蔵の版本（＊付）、早稲田大学図書館所蔵の版本（＊＊付）、早稲田大学図書館の古典籍総合データベース（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/）により確認した。

＜付記＞本稿は 2011 年 7 月 9 日の早稲田大学日本語学会の研究発表会で発表した内容を修正したものです。研究発表会の際にご教示くださった方々に心より御礼申し上げます。

―やまだ　りな　早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程―